



## 「什の掟（じゅうのおきて）」からの学び

学校長 三瓶 徹

江戸時代、会津藩（今の福島県）は人材育成に力を注いでいました。教育施設として藩校・日新館を創設し、同時に教育制度を徹底させました。6歳から9歳までの藩士の子弟は、地区ごとに10人ほどの組に分けて統括されました。この組のことを「什」と言ったそうです。10歳になると「日新館」へ通わなければならないため、「什」は学校生活の準備をするための組織であったともいえます。

「什」は什長をリーダーに子どもたちが自主的に活動するもので、会津藩士の子弟としてふさわしい行動ができるよう、集団の中での掟がありました。それが「什の掟」です。

- 一、年長者の言うことに背いてはなりません
  - 一、年長者にはお辞儀をしなければなりません
  - 一、うそを言うことはなりません
  - 一、卑怯な振舞をしてはなりません
  - 一、弱い者をいじめてはなりません
  - 一、戸外で物を食べてはなりません
- ならぬことはならぬものです

というような内容で、どの町の「什の掟」も最後は「ならぬことはならぬものです」という言葉で締めくくられていたそうです。「ならぬことはならぬものです」は「ダメなものはダメ」ということです。人として生きるためには、理屈や言い訳が通らない絶対にやってはいけないことがあるという意味が込められています。礼儀がないこと、うそをつくこと、弱い者いじめをすることなどは、人間として恥ずかしいことだと戒められていたのです。違反者に対しては、什長を中心に什のなかで話し合い、制裁の度合いを決めていたそうです。会津藩の子どもたちは、「什の掟」を大人から言われてつくったわけではありません。子どもたちだけで掟をつくって実行していたのです。

什の掟を今の社会、学校教育にそのままスライドすることはできませんが、学ぶところはたくさんあると思います。子どもが幼少期にあるときは、親子間の結びつきのなかでしつけや教育が行われるのが一番です。挨拶や言葉遣い、食事のマナーなどをしつけて生活習慣を身に付けさせ、家の手伝いをさせて褒めたり叱ったりしながら育てていく必要があるでしょう。また、学校へ通うようになる、教師や友達との交流を通じて教育が行われ、そこには信頼関係が大事になります。皆さんは、これから多くの人とかかわりながら生きていきます。いつも物事が自分の思いどおりにいくとは限りません。どのようなときであっても、周囲の人のことを考え、我慢すべきときは我慢し、友達と心を通わせながら楽しい日々を過ごしてほしいと思います。